
 学 会 記 事

第34回新潟画像医学研究会

日 時 平成7年11月11日(土)
午後4時30分～7時30分
場 所 ホテルニューオータニ長岡

演 題 1

1) 小腸原発の malignant gastro-intestinal stromal tumor の1例

将積 浩子・瀬戸 光 (富山医科薬科大学
放射線科)
柿下 正雄 (同 放射線基礎
医学)
二谷 立介 (済生会富山病院)
田近 貞克 (外科)
松能 久雄 (金沢医大二病)

gastro-intestinal stromal tumor (GIST) は消化管の未分化な間葉系腫瘍のひとつで病理学上の新しい疾患概念であるが、画像診断の報告はなされていない。われわれは小腸にできた GIST の1例を経験したので、その画像所見を中心に報告する。症例は62歳男性。腹部腫瘤を主訴に済生会富山病院外科を紹介受診した。CT では小腸の腸間膜側に 13 cm 大の腫瘍があり、内部で air-fluid level を形成しており、壁が厚く不均一に造影された。手術では易出血性の腫瘍が確認され、病理組織で epithelioid cell と spindle cell からなる未分化な組織で actin 染色陰性、CD34 染色陽性であった。

2) 経過観察した limy bile の1例とその実験

新妻 伸二・三上 桂子
佐藤 和美・山田 一美 (新潟県労働衛生
医学協会)
鬼山 毅

8年間にわたり人間ドックで、胃X線検査と超音波検査により経過観察され、胆石が3年目に limy bile となった例を経験した。X線的には陽性結石がみられ、3年目に limy bile になっただけである。ただ胆嚢内に見られた陽性結石が陥頓したのでなく、別の陰性結石が陥頓したと考えられた。超音波では1、2年目は胆石だけの所見であり、4年目からは胆嚢内の石灰のため、胆石は不明となり、全反射と音響陰影だけとなった。3年

目は最初全反射であったが、圧迫により内部の胆石も見えた。塩化カルシウムの懸濁液を作り模型実験をしたが、20%では胆石がよく観察され、40%では全反射、30%で全反射と結石の観察が見られ、3年目の所見と一致した。

演 題 2

1) 乳癌検診の問題点

佐藤 敏輝 (長岡中央病院
放射線科)

乳癌検診の目的は乳癌の死亡率を減少させることである。現在の乳癌検診は視・触診法で行われている。しかし、これが乳癌の死亡率を減少させるという証明はない。検診を継続するためには、randomized clinical trial を実施し、死亡率の減少を証明する必要がある。上記の根幹的問題は別にして、現在の乳癌検診の大きな問題は検診発見癌が少ないことである(当院乳癌全体の6%)。この原因は受診率が低率であることである(長岡市の乳癌検診受診率は8%前後を推移)。また検診発見乳癌と外来受診発見乳癌の予後に関しては差がないか小さいという報告が多い。そこでより小さな癌の発見をめざして検診にマンモグラフィの導入が考えられている。しかし小さな癌の何%が致死的な進行癌になるかという問題は解決されていない。死亡率の減少で検証することが不可欠である。またより小さな癌の発見をめざした場合、偽陽性率の上昇もかなり問題となることが予想される。

2) 肺癌検診の精度管理上の問題点

小田 純一 (西新潟中央病院
放射線科)

1983年から1992年までの10年間の新潟市肺癌検診の検診成績を前半5年と後半5年の2期に分けて比較し、この10年間で検診精度が向上してきているかどうかを検討した。

肺癌発見率や精検受診率などの比較では前半と後半で違いはみられなかったが、発見肺癌の生存率の比較では、前半5年の発見肺癌93例の5年生存率が33%だったのに対し、後半66例の生存率は64%と有意に向上しており、手術症例106例についてみると前半の43%が後半では86%と著明な生存率の向上が認められ、生存率の面からは検診精度が向上していることが確認できた。しかし、検診受診率の比較では受診率の著明な低下がみられ、新潟

市の主要病院受診肺癌患者集計の結果でも、検診で発見される肺癌は全肺癌の10%程度であり、最近の検診発見肺癌の生存率向上が社会的にはほとんど貢献していないと考えられた。

3) 胃集検高受診率地域の胃癌死の推移

中村 忠夫 (小千谷総合病院
内科)

魚沼地域胃集検協会は小千谷市、十日町市、三魚沼郡、人口約23万人、40才以上約11万人を対象に行っている。受診者数は毎年3万人を越え、約24%と全国的に高い受診率の地域である。胃癌発見数も99人をピークに最近では70~80人で、発見率は約0.25%と高い発見率であり、精度管理の整った検診団体である。当協会に属する守門村は人口約6千人の村であるが、毎年、2千人以上が受診しており、この村の胃癌死亡の推移について調べてみた。人口が少ないため変動が大きいが、比較的胃癌死亡は減少してきており、死亡者の多くは検診歴のない人達で占められていた。寝たきりの人や、精神科などに長期入院している人、村外の老人施設に入居している人など、検診を勧めることが出来ない人が多くいた。また、過去に見つけられた胃癌の人の中に十年以上長期生存している人は早期癌のみならず、進行癌でも集検発見に多いことが明らかであった。

追 加 発 言

三島町の胃癌死の実情

塚田 久子 (三島町保健婦)

4) 胃集検発見し手術拒否した胃癌の子供

原 久弥 (千葉県安房医師会)

安房医師会は安房医師会病院を検診機関として千葉県房総半島南部、安房11市町村40歳以上地域住民9万人を対象に、昭和43年より胃集検を行い、平成6年までで発見癌は706例になる。そのうち発見年度に手術を行わなかった症例は47例ある。それらの症例を追跡調査(追跡調査率100%)し、とくに手術拒否例について以下の結果を得た。

- ① 非手術例のうち手術拒否は15例(早10進5)
- ② 手術拒否例の生存期間：進行癌は短期間死亡例が

多く、早期癌は長期生存が多い。他病死2例を除いた9例中、5年以上生存は5例、12年以上生存が2例。その1例は11年後Ⅱcが3型に進行しているのが確認されている。早期が進行して死亡したものは3年6カ月と9年後死亡(6年後胃切除)の2例。

③ 手術拒否例は5年までの生存率は良いが、それ以上では手術例と大きな差で生存率が低下している。つまり長期に生存するには早期の癌病巣の摘出が必要である。

特 別 講 演

「がん検診の問題点を考える」

慶應義塾大学放射線科学講師

近 藤 誠 先生

第35回新潟画像医学研究会

日 時 平成8年6月8日(土)

午後3時~6時30分

会 場 新潟東映ホテル

演 題 1

- 1) 海綿状血管腫と誤診した小さな神経膠腫の1例

古澤 哲哉・岡本浩一郎

酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)

伊藤 寿介 (同 歯科放射線科)

熊谷 孝・阿部 博史 (同 脳研究所)

田中 隆一 (脳神経外科)

症例は23歳の女性。突発する後頭部痛にて発症。発症当日のCTで、右海馬傍回から帯状回峡にかけ1cmほどの脳内出血を認め、右迂回槽にくも膜下出血を伴っていた。4日後のMRI T2強調像では病変は低信号域から等信号域の辺縁部と高信号域の中心部として示現され、我々は海綿状血管腫と診断した。手術後の病理組織学的診断は anaplastic astrocytoma であった。Retrospective に読影すると、浮腫と考えられた T2 強調像での病変周囲の高信号域が造影されており、浮腫のみでなく腫瘍をも反映していたと思われる。腫瘍性の頭蓋内出血と非腫瘍性の頭蓋内出血は鑑別に苦慮することがあるが、一時点での画像診断のみで判断せずに follow す